WASON
HQ
1104
J74

Mar. 24
1888
no. 102

廿一年三月（版權所有）廿四日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢 府内無税 郵税一錢 每土曜出版

第百二號

社説
日本の家族（第七）一家族の女王

論説
告別之演說（植村正久）

批評
日本情交之變遷○日本將來之婦女

叢話
からだの持方（加藤弘之）○正行固く辭す○佐野源左衛門○婦人と禁酒（阿部磯雄）

小説
都鳥○小說神髓

佳傳
婦人慈善會の看護婦

寄書
文苑（鈴木弘恭撰）○小供の話～溫和なる手

新報
高等女學校の校長○隱娼と植木枝盛氏○佛者及女權論○其外二十件

附錄
第八卷總目錄

書二〇三一、一一五

詳和堂中川昇刻

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 102, March 24th, 1888.

EDITORIAL:— Family Life in Japan: no. VII. (Queen of a Home.)
LEADING ARTICLES:—A Farewell Speech by Rev. M. Uyemura: No. II.
CRITICAL NOTICES:— "Ni Hon Jōko no Hensen", (History of Canjugal Love in Japan.); "Ni Hon Shorai no Fujo," (Women of Future Japan).
MISCELLANIES:— How to Preserve Health, by Senator H. Kato: No II; Masatsura, as Jrue Gentleman; a Woman's Temperance Union, by Rev. I. Abe; A Picture of an Epic Poem.
NOVELS:—"Miyakodori": No. I.; Bonquet of Novels.
BIOGRAPHIES:— A Kind Sister in "Sisters of Cha Rity."
CHILDREN'S COLUMN:— A Gentle Hand.
CORRESPONDENCES.
GENERAL NEWS.
SUPPLEMENT:— Contents of "The Woman's Magazine," Volume 8 th.

前號(第百壹號)目次

●社説 日本の家族(第六)家族幸福の大根底
●論説 告別の演説(植村正久)○小兒の精神及保護法(榊淑)
●批評 浮雲○女子教育論
●叢話 からだの持方(加藤弘之述)○釣瓶のおさがほ(しのぶ)○百八一首一口話(鈴木弘恭)○生死
●小説 小説神髓
●佳傳 レデー、ラッセル
●寄書 中島俊子吟作○感を記す(太田錦子)
●小供のはなし 不思議の新衣裳
●新報
●附録 和文學講義十一回(鈴木弘恭)

●珊瑚の珠 (第五十八回)

○ベンタム曰く男子は婦人の自有の權を奪はんと欲すとも得べからず婦人は既にこの世界を主管治理する恰かも專制の君主の如し縱とひ婦人の用ふる權は主として慈愛に由ると雖ども其權は無限なり。

○ジョンランドルフ曰く我若し母の教育を受けざれば上帝を信ぜざりしも知る可らず我が上帝を信ずる人となりし所以は幼年の時母常に吾が纎手を把て吾をして跪拜せしめて吾が父天に在り云々と禱りし聲音狀態今尙ほ歷々として聽に存すれば也。

○ボルク曰く一世を觀るに純粹潔白にして一己の職分を盡す人あれども其の公衆大同の利益と爲り邦國の職事を行ふに至りては家を愛する人に若かず蓋し最とも善く家を愛する人は最とも善く邦國の爲に有用の役を爲すと也。

○ナポレヲン曰く小兒成長後の行狀の善惡は全く其母に關係す又曰く佛蘭西に尤も欠くる所ろのものは善良の母也。

○大統領アダムス曰く我れ小兒の時に極大の福を受けたり即はち我母常に小兒の品行を陶鑄せんと思慮を勞せられたるとあり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百二號　明治二十一年三月廿四日發兌

社説

○日本の家族

（第七）一家族の女王、

女子の學ぶべき理學は薪炭の燃方を研窮するに在り、女子の學ぶべき化學は料理鹽味の調合を研窮するに在り、其の地理學は部屋々々の房室を知るに止まり、其天文學は天氣日和の占ひを心得るに止まり、動物學は犬と猫との仲の惡しきことを承知し植物學は柿の八年にして實ることを記臆すれば則はち足る」とは古人が婦女子の上に需めたる所ろの感想なりき。此時に當りては家屋を以て女性の本領と定め表裏の門を以て其の境界を限り凡そ事なくして外出するは既に女德を破るに均し暴りに外人に接するは殆んど其操を失ふに同じと爲したり其の女性を待するの失敬なること言語に絶すと云ふべし吾人は夙に此の如き處置の甚はだ人權を無みするものたるを信じ其の餘弊の倘ほ今日に存するものは速かに之を取除かざる可らざるを信じ平生毫末も之を容謝せざるもの也。

然れども之と同時に所云る男女同權論なる者を退くるの熱心は、敢て古風の弊習を取除かんとするの覺悟と異なることなし、蓋し吾人は女子を家屋内に押込むることを惡くむものなり然れども亦た之を家屋外に追出さんとするものを惡くむこと之に同じ、惣べての女子出でゝ政治界に奔走し男子と投票の數を爭ふが如き若くは惣ての女子出でゝ職業社界に競走し男子と賃銀の高下仕事の多少を競ふが如きならば是れ眞に國家の大不幸なり。吾人は固より女子が政論を爲すを嫌はず亦た女子に職業の多からんことを好まざるにあらず反つて惣べての女子が悉く政治に注意し惣べての女子が能く職業を得る程の社界と爲らんことを希望して止まざるものとは云へども其實際に於て女性が悉く政治家と爲り悉く職工と爲るを以て大不幸の出來事なりと信ず。

左れば女子は家屋内に押込めらるべきものにあらず亦た家屋外に追出さるべきものにあらず即はち家族を以て其の本領の働らき場所と定め之を淸くし之を樂くし之を高尙にし之を有益にするを以て其の大事業と爲すを正當とす。故に家屋内に引こもりて外に出ざるは不可なりと雖ども家族中に立籠りて專途の働らきを爲すは今後永遠に女性の務となるべし又時に家屋外に出でゝ四方に奔走すること固より不可ならずと雖ども

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家族を離れて冷淡爭鬪の他人界に競走するは今後永遠に女性に適せざるものとなるべし、スマイルス曰く家は婦人の版圖本領なりと蓋し此を謂ふ。

抑も女性は事の變化多きを嫌らひ其の精神を一途に凝め得る者を樂しみ日々同一の人を愛して日々之に變はりなきを喜こぶものなり故に一日又一日殆んど變化なきの仕事を爲して毫も之を怨まず反つて奔走繁忙の多事なるを以て心の安んぜざるものと爲すと大に男の氣質と相ひ異るものあり、左れば男子外に出で丶働らき女子内を守りて家を齊ふるは正に至當の分勞たり之れ天の命ずる所ろにして永遠相違あるべからず世何如に進化し族制何程に變革ありとも凡そ男女兩性相異なる所の者頓はかに消滅せざる以上は永刧絶へて此事ありとは覺へず眞に天命の性相侵すべからず男女各々其分を守りて則はち互ひに相安んずる所ろあるべきなり。之を以て女學生の血氣尙ほ盛んなるや或は揚言して終生遂に嫁せずなど申すものはあれども血氣既に治まり本來の天性温として發達せば自然の力の趣く所ろ勢ひ意思よりも强よし則はち密かに前日の揚言を悔やみ謙遜として我を折り優乎たる佳人とならざるはなし、女學校に於て讀書攻學に餘念なかりしときは彼の人の細君が子を抱き乳を含ませ終日終夜其の保育に力を盡して絶へて閑雅高尙の豫裕なきを見又た朝々暮々料理裁縫に多くの時間を費いやし忍耐綿密に心を制し絶へて活潑爽快の面白味なきを見て斯ては妾等到底人の妻たるを得ず寧ろ一生ミス某と名乘り勝手に世間に出走るいて磊々落々の大事業を爲し一つには驕慢なる男子の心膽を寒からしめ二つには吾が同胞姉妹の卑屈心を打破るべしと覺悟さる丶とあり然れども春來つて梅蕾の初て衣を脱するとき四面の温氣陽として異光あり一旦意氣相投ずるの丈夫に會し雙手相連つて天縁の全く熟する時心情則ち一變す、曩には外出逍遙を以て爽快の遊びとしたるが今まは花を插し器具を布置し甘く室内を整理して靜に家中に樂しむを以て尤も愉快に感ずるに至らん曩には裁縫料理を以て無味窮屈の藝と心得育兒齊家の如きは尤も面倒なるものと思ひたり然れども今は心中密かに喜んで之れを爲し食膳に自ら擅梅したるものを供へて相對して之れを喫するとき若くは新衣を料し得て之れを郎君及び愛兒に裝はせたるとき其喜び果して何如ん。左らば女子が其家族を管理するは本來の職務にして其自然の性質に於ては之を行ふより樂しきはなかるべし故に但千百中一二の然らざるものと及び時勢の必要に

迫られて敢て本然の樂みを犠牲にし止を得ず此の自然の嗜好を制するものとを見て則ち早々に斷定し女子の本分は家族を管理するにあらずと云ふものあらば之れ大ひなる誤りたり、松は亭々として伸長すべし然れども時あつてか曲り又時あつてか匍匐すべし其の曲り匍匐するを以て松の自然を得たるものとせば何如ん豈に之れ變性男子を以て總べての窈窕たる佳人に需むるもの丶類にはあらざる乎。

世上の姉妹諸君、諸君本然の性質既に之に適し社會分勞の大勢亦た之を要し天の諸君に命ずる所ろ又恐らく此途よあるが如し左らば諸君は甘んじて之を爲し安んじて之を行ひ敢て不平不滿の念ひあるべからず否な諸君本然の性すでに之を好むが故に惟ふに絶へて不滿不平の歎あらざるべきか。然れども世に若し外事に働らくを以て事の功徳の大ひなるものとし內事を整理するを以て務めの尤も因循なるものと心得るあらば之れ則ち諸君の敵社會の敵及び天命の敵なり吾人は如此き論者の甚はだあはれむべきを歎くものなり、五臓六腑の皮膚手足に劣らざる限り爛熳たる開花の秋實を凌がざる限り內務大臣大藏大臣が外務大臣に權を奪はれざる限り漢の蕭何が平天下第一の功臣たらん限りジヨセフヒン后獨り能くナポーレヲンの心氣を制し得たらん限り吾人は內を守るもの丶功その外に出づるもの丶功に劣るあるを信ぜず。蓋し尤も多く人の目よ着く所ろは尤も多く人の勉强する所ろ也然れども人之を見ず世之を知らず勳章の報ひあく新聞紙の賞賛あく寂として聲なく闃として其跡あきの地に至つては能く之を正直に處理するもの尠かるべし左れば列國望見し輿論喝采するの談論場に立て正々の演説を爲すものは左程に感服すべきにあらず夜深うして人眠り四壁沈々として聲あき折よく不正の申出を退くるものあらば則はち尤も之を敬崇すべき者あり、此故に吾人は大丈夫が万國の注視する活世界に立出て丶當然の行ひを爲すを珍らしとせず彼の家に止まり人の知るとなき境界に於て能く義務を盡すの人を尊うとむ女子の行ふ所ろ即はち是れ也吾人は啻に女子の事業を以て男子の事業に劣ると爲さるのみならず實に女子の立命地の甚はだ尊うとむべきを知り平素之を思ふて啻に其の安心を學ばんと欲するもの也、諸君豈に不滿不平あらんや希はくは尙ほ自から安んじて其の行爲の高尙あるを喜び玉ふべし。

嗚呼女子よ汝ちの涙は天國の露なり、優たる汝ちの情は愛花の馥郁すべき温室あり、世は汝あるによつて濕るほひ、汝あ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るによつて樂し、若し汝なかりせば、虎狼人界に充滿して世は茫々たる大砂漠とならん、汝の勵ましの言葉を得ば困危辛苦の艱しみハ乍ちにして忘られ、汝ちの慰めの信切に會はゞ失望落膽の念ひも頓かに復活す、汝ハ能も斯忍び、能も斯思ひ凝らさるゝよな、吾ハ浮雲轉變の世に於て、毫末も汝の愛を疑はず、汝ちが能く吾が爲めに萬事を犠牲にするを謝す、汝あるによつて眞愛を知り、汝あるによつて正義を守り、汝あるによつて人世亦樂しみあるを知る、女子よ汝ちの德は贊美べき哉吾人ハ謹んで之を汝に謝し、亦た汝を與へたる神に謝す、汝ち希はくは永久に吾と同伴して其の美德を消すと勿れ。

吾人が女性一般に對するの感想大率ね然り人若しヘンリー、サウスゲートの著書「古來の男子何如に女子を評したる乎」の全卷を見よシエークスピアも如此く女子に感謝したりミルトンも亦た如此く感謝したりリツトンもヂツケンスも彼のジヨンソン翁もポープ仙も皆な如此く感謝したり試みに尤も誠實なる日本の男子に聞けよ男子亦た皆な如此く感謝すべし則ち詩人より農夫に至るまで希臘の學者より日本の紳士に至るまで皆な家族の女王を以て汝ち女性物躰の上に托し參らする也諸君希はくは之を受けよ。

纎々たる諸君が手ハ其の濃密ある愛情の爲に使はれて一家の器具窓かけ生花机テーブルを布置し幅一幅の掛よう繪一葉の張樣に至るまで悉く是諸君の愛情を現はさゞるはなし斯て疲勞したる勞役夫を慰さめ斯て落膽したる失望人を勵まし戶々の室家ハ則ち全國の武勇兵を養成する操練場と爲る、而して諸君が軟らかある手を以て撫づる小兒の頭腦ハ後ちにニウトン、ベーコンの頭腦とあり諸君が家庭に於て敎ゆる古英雄の快話は異日ナポーレヲン、ワシントン、の傑子を出すべし。諸君が慰むる所ろの艮人、諸君が撫育する所ろの童男童女ハ、他年皆な是れ其の効驗を世界に顯揚すべし諸君が密室の内に落したる涙は既に天國を造り出すの足臺と爲れり諸君が陰々理に養ひたる愛情の花は後世大に開ひて則ち黄金世界の極樂を呈せん女流諸君の望み亦た樂しひ哉。

謹んで日本の姉妹諸君に望む日本の家族ハ諸君の知る所ろの如し諸君ハ家族の女王として固より之れを悲しむべし然らざるも優渥なる諸君の愛情ハ盖し之を見るに忍びざるべし諸君希わくば志を決して大に其德を發揚し以て此の大不幸福なる日本の家族を一變せしめよ。講檀に立つて堂々女權論を述るハ諸君の名譽なり鹿鳴館に踊り金鞍の馬に乘ずるも亦た諸君

の壯遊あり慈善の大市を開いて慈善の金を集むるも亦た天下人が諸君の爲に尤も注目する所ろ也如此き事もとより不可あし然れども吾人は之と共に更らに諸君に隱密なる靜肅なる尤も音聲なきの大事業を求めざるべからず。諸君請ふ能く忍び能く隱れ先づ其管理する所ろの戸々の家族を幸福にせよ玆に和氣雍々として充滿し一家團欒して和樂を極めば吾人及び万國民が共に日本國の爲に痛歎する所ろの諸ろの大弊害忽焉として去るべし、一家齊のつて一國齊のひ一家和して一國和し一家强うして一國强し諸君もし一家を齊うれば則ち既に内務大臣たるに均し既に一家を和すれば則ち既に警視總監たるに均し既に一家を强うせば則ち其力海陸數十万の軍兵と異るとあし諸君の懇切決して輕々しからず其の日本國の爲めに益せらるゝと亦眞に莫大あり。故に吾人は日本家族の不幸福を浩歎し之を改良するの諸策を建てたり、諸策既に行はるゝと雖ども姉妹にして若し立たずんば万法空に歸す諸君は家族の女王なり万づの改良策の神髓なり諸君にして若し先づ大に志を決せば諸々の善策踵を接して行はる故に吾人は之を望み之を信じ嚴然として熱禱を神前に捧ぐるもの也。(大尾)

"Woman's Tear is a Drop of Heaven."

論說

○告別の演述（其二）

植村正久

世の中に成功と失敗と云ふとあり、之れ程ど人の心を動かすものはない、サクセス云ひフエールルと云ふものは、殆んど人をして狂せしむる所ろのもので、此の成功の爲めには腦病に罹つて勉强するものもあれば、又色々の辛苦をする人もある。アナタ方も亦た成功を望まるゝ所ろの人であつて之は宜しひとであるが、然し本當の成功とは何乎、本當の譽れは何乎、之れ先づ考ふべきとである。イエスの云はるゝには汝等先づ神の國を求めよと、然し人は大抵成功の字義を誤まり眼前に立派なる社會に立つとであると思ひ、ソコデ遠く考へずして、多くは甚はだ近道を行くものなるが、本當の成功は決して斯の如きものであく、人のタマシイを淸くし人の心を立派み仕上るとである、即はち神の前、人の前に、はづる所ろなきは即はち本當の成功である、然るに之を先にせずして末に走り、世の譽まれや浮たる樂しみを求むる方々は、何如に其藝が出來るに拘はらず、其の靈は實にキタあきものであります。支那の孔子が云はれたに、周公の才の美ありと雖ども若し奢り且つやぶさかある時は見るべきものなしと、實に

何れ程の學才ありとも若し其の靈魂が善くないときは眞とにみともなきものであると云ふとです。餘まり道德々々と云ふときは人は大層之をアキて聞くとを厭ふものです、然し人間は之を聞くとを厭ふほどに惡るひものと爲つたのであります實に惡しきには走り易く心を立派にする方へは目がつかぬのであります。名譽、そも名譽は何でありませうか、エドモンドボルクは英國に名高い政事家で國會に於てヘスチングと云ふ印度の知事を訴たへた人である。其の訴への言葉は眞に正く堂々として雷名世にかゝやいたるとでありました、然しボルクは其名の尤も轟きわたりし比ろ言ふた言葉に、何如なる名譽が買ひ得らるゝとも吾は最早麥一把を與へてでも之を得んとを欲せずと云ひました。名譽といへども實にハカナキものであります、然し私はアナタ方を世すて人のように爲さんとするにてはない、名譽も固より重んずべきであるが、然し其の價ひ丈けに尊びたいとであります、彼のイエスの名譽は今日ホザナよ萬福よといひて、明日は之を訴へたり、秋風の如く變わる所ろの世間の名譽の爲に一身をあやまるは實に歎かわしきとであります。一躰名譽を好むは人間だれでもの情であるが、心を打わけて申すときは、女は人から愛せらるゝ人から善く思はるゝと云ふとを尤も好むもので、之は其の一つの長所であつて、又たマチガヒに陷いり易すい所である、どうもハデナ世間に立派に見らるゝとを求むるの傾きあるものです。故に此處を能く考がへなければならぬ、名譽即はちフエームよりも大切なるものあり、成功は名譽に非ず、又學門が成功にもあらず、學問が出來ても惡しき人があります。かつて百人一首一夕話と云ふ本を讀みましたが、其中には實に奇代の人計りで、眞人間はない、其男女は皆なカタワである、甘く歌ふ所ろのキタナキ人、うるはしき聲を出せども其下より臭氣紛々として鼻をつく所ろの人々であります、本當の成功は斯の如きものにあらず、靈魂を全くするとで、即はち己れの義務を全うするとが第一の成功であります。故に立派に見へ人によく思はれようと云ふとよりも、立身出世よりも、たとへ卑しき所ろよありとも何ほ本當の成功は得らるゝものであります。凡そ名譽成功を求むるに二つの仕方がある、一つは評判、金のもうかると、を追つかけて行き、汗を流し、ヒゲを以て人を倒して、之を追ふて行く、之を伴につくる筈の者を自分が其のヲトモに爲り、主人になるべきものが其のアトを追て行く、實にミトモ無い、之は一つの仕方であるが實に

ミニクヒ。夫よりも我れ先づ立派の人になる、我のタマシヒが高くなる、腦中に神の國を造り、神の前に忠義あるシモベとなり而して色々のものを吾がヲトモにするようにしたし、人に善く思はるゝとも固より望む筈のもので、又た勢力も得たきものであるが、然し此等は皆な吾がお伴にしたし、決して之を追かくるとを致したくない、此の一言をアナタ方どうぞ能く記臆して下さい。何卒成功を追はずして之を我にしたがはせたいものであります、見たまへ、世の大事業は多くは道念義務の心より起つたるものであります。先づ此の聖書を開らいて見まするに、ヨセフが埃及のポテフハルの所に居りましたとき、心を亂さする所ろの事があつて、眞に滑らかにして若し一歩をあやまるときは數千丈の下に陷いる如きとがありました、然し遂に之に勝ちましたが、之は何を以て勝ちし乎、即はち道念理想の高かりしゆへであります。次にモーセは王宮に於て敎育せられ武藝兵法の奧義を極はめ數百万の人の大將となるべき程の力あり、万世に傳はる海陸軍の法律をも造くり、地質學者の及ばぬ開闢のはなしをもかきたり、然しモーセは此等の事を以て名ありしやと云へばそうでない、即はち自分の同胞兄弟が奴隷となつて苦しむを見て之を悲しみ、后には大國の政を取とも出來べき地位を惜しまず、王の宮に居つて一日の安きを貪ぼるは快よからず、平民とあり浪人とあるとも、同胞と共に苦しみを分ちたいとの志にはげまされて、遂にイスラエルの人々を救ひ出し、空前絶后の事業を爲しましたが、即はち又た其の道念義務の心に導かれて致したとであります。次に又た彼のダビデは年わかく、野に羊を飼ひ居り、矛もなく、躰もよわくありしが、然し奮然として彼のゴリアと戰はんと思ひ定めたるは、神の民の疾苦を憂ひたるゆへであつて即はちたゞ道念義務の爲めに爲たるとであります。又かのエリアの如き、當時世の中が惣躰に偶像に迷よひ陷いりたるを悲しみ、異端邪道を取去らんとを慷慨し、只だ又た道念義務の爲にはげまされて、國王をも擊ち去りて全く此の迷よひを排擊したのである。又かのヨハネの如く國王が感淫の大罪を侵せるを見て、面前に於て之を責め、遂に首きらるゝに至り、其他ポウロ、ルウテル、南北戰爭、ジヨンハワードが牢屋に行きしも、武士が君の陣頭馬前にかばねを曝らすも、水夫が客人を先に舟に乘せて自分共の沈むを待つが如き、凡そ此等のかゞやきたる事業は皆な道念より起りたるものであります。ドウゾ此の敬まうべき此の尊うとむべき念慮が皆

さまの心よありたいもので、どうか之をはげまし、其道念がアナタ方の心にあふるゝように致したきものであります。故に成功とは決してめざましき事業の上にのみあるものでなくアナタ方が日課を學ばるゝ中にも尙ほあります、只だ神のみ其の人のみが知る所ろの事の中にあります、其の他人の知らぬ所ろの事の中にも、ダビデがゴリアを打殺したるよりも尙ほ大ひあるとがあります。シエクスピアの句に、情慾に勝つ所ろの人は、吾は之を心の底にヒメ置いて尊うとむと云ひました、即はちシエクスピアは大軍を破る所ろの人を尊しとせずして、正義の念を以てタカブリを去りチタミを退ぞけたる人を大事にして、之を心の奥に置たのであります。アナタ方どうぞ此のシエクスピアの心の奥に置かるゝ所ろの尊とき人になられませ　(未完)。

批評

(63).　日本情交之變遷　(中本一冊(百九十頁)定價四十五錢　發兌所東京神田同朋町　晩青堂)

本書は末兼八百吉氏が日本中古以來の情交史を述べたるものにして第一章には王朝時代より平氏滅亡の時まで、第二章には應仁の亂前后即はち戰國時代の間、第三章には封建制下、第四章には現今と分ち各時期の情交を叙し第五章には其變遷を總說し且つ我邦情交の通弊を論じ其改良法の如きは別卷に於て論ぜらるゝものゝ如し。情交史は開化史中尤も困難あるものなり然るに著者は引用の書を得ると甚はだ少くして其の變遷の次第を述ぶる所ろ頗ぶる不充分の感なきにあらずとは云へども其の僅かに引用する所ろの者を縱橫自在に使ひ尤も利巧に尤も面白く言廻わして大躰の遷り行きを事の見事に說き去られたり搆思の巧みなる運筆の達者なる共に尋常あらず特に其風流多情の思ひ洋々として紙面に溢れ眞に近作中類ひあき一種の面白味を呈せり、現今は文學上嚴冬の節にして情交の界ひ殆んど砂漠を見るが如し而して忽まち此の錦繡文字を得たるは吾人の深く謝する所ろ也。

今ま書中の佳所數節を左に拔摘して此書の文章と議論の一斑を示す凡ろ有益文字の空しく屑屋の籠に納めらるゝは遺恨中の尤も殘念あるもの則ち吾人は先づ不信切無頓着なる世の批評家の注意を惹き起さんとするもの也。

予史を讀て平氏の末路に至る毎に未だ嘗て其弓馬に拙く〱して風流に富み流離顚間の餘尙ほ閑雅の姿容を失はさるを憫み風流の道遂に之と共に煙鎖せ〱を悲まさるはなく東洋史中央千萬荆蕀の間よ梨花一枝春雨を帶ひたり〱者は古今只平氏の西遷と項王の境下に於て之を見る其家を擧げて京師を辭するの日に當りては琵琶を奏〱て別離を宣るあり其臣を放ちて關東に歸すあり歌章を身後に托

するあり其將に亡ひんとするや或ハ笛を弄して水に沈み或ハ楚囚となりて往生急を操せり鎌倉右府が伊王千珠二姫をして重衡に侍し其名殘を惜ましめしが如き亦事を解するの好男子と云ふ可し尙其外に浪速潟三草の山の花宿り檀の浦半の海の宮嗚咽すべきの至りにこそ是より後は源北條封建の基礎を確立し足利織田豐臣と世は風林の飛花落葉專躰忽ち一變して乾株武骨を尙べり。（自十頁至十一頁）

函を破るの第二は所謂忍ひ合なる者にて當時尤も多部を占む夫の戀綱の如きは當時の處女以て古風なり流行後れなりとし斯る迂路を蹊むに堪へずとなし專ら忍ひ合の法に從へり走獸急なるときハ穴を擇ばず鳥過りては木を擇ばず函入娘の情緒既に絕頂の突點に達せり亦何ぞ人物の甲乙氏族の良否を問ふの暇あらんや其朝夕起居する手管馬丁に美少年を得ざれば之れを近巷の丁壯に求む十戶の巷亦必ず相隣の男子あり薪炭相合ふ時は其燃燒を起すや亦疑はず茲に其父母は愛孃の背丈け伸ひ綠髮肩を垂れ早標梅に近けれぱ遷延日を移さず却て意馬の狂はんとを恐れ人を別ちて奔走せしめ漸く合格の佳婿を得たれば先つ一步の安堵を爲し欣々然として心嘗ひ女子の錦腸何如を問へば九鼎大呂屹然として動かず只顏を紅くして俯向するのみ之を强ふれば纔かに淚を以てし而して後始めて女子に自ら許すの人あるを悟るは亦復後れたり矣然れども新婿既に定まり且女子の意尙移し得べきの慮あれば阿母は女子を一室に呼び溫和に不了簡を諫めて父母從來の苦心を喩し情人の短處を發き新婿の器量骨柄を誇稱し百方之を意中の人と絕たしむるも方盛の血氣既投の熱情は容易に二世を契りし人を遺失し未知未聞風する馬牛も相及はざりし人に許して偕老の身を委する能はず此時に當りては猶佛人自由を欲するの餘滴爭修羅の塲裡に巴里の都城を認むるが如く澁々たる紅淚徹夕徹曉の滴血は流れて九泉に牲くも其果して愛を割くや否未た知る可らざるなり斯の如きの類新誌の載する所其多きに堪へず而して其末尾の結果は各一徹ならず父母の怒を恐れて貞操を曲け默々として新婿に聽從するあり一たび嚴命の稀々たるに怖れて應諾をなせるも尙契りし人の離れ方なく琑瑳既に設け新婿輿入して衆客の歡唱を朗吟するに當り新人は忽俯として形影を失ひ早巳に浦頭に帆走らんとするあり或ハ兩身相束ね肌理相符し落花流水遠く未來の一蓮托生を期するあり郎姐相携提して期中もなき山川郊路に漂泊して父母の繇威を待つあり父母を恐みて一時を縊死に快するあり此流の人をして倫敎若くは新約克の一巻に生れしめなば羨むべき情交を遂け甲斐甲斐しく人事を了りて迷眼の路に上るべきに不幸にして日本に生れたるが故に花實兩ら收めず痴情の爲に身を誤るは笑ふべき限りなるも其志望を果さずして此に至る亦憐むべきに堪へざるなり。（自百九頁至百十二頁）

(64)・　日本將來の婦女　（中本一册（百三十六頁）正價三十五錢　發兌所東京中橋大鋸町四番地自由閣）

此書は中山整爾氏の著作にして全巻を四篇に分ち第一篇には日本婦女の現狀を說き、第二第三の兩篇には日本婦女の前途を說き、第四篇には日本婦女の要務を說、第五篇には廢娼妓論を說かる。氏は兼てより女權論に一旗を揚げられたる地方新聞の記者なるが此度又々此一書を著すに至られたると其の眞切只だ謝すべき所也、文章は甚はだ明快流暢よして絕て差支を覺へざれども窮理ちと淡泊にして肝腎の所ろを自分極めに輕々論じ去り何の苦もなく反對論者を下に見らるれども此邊尤も氣遣はしく思はる、殊に一瀉千里の勢にて間ま前后よ矛盾したる議論を見るとあり第三十五頁に、

余は熟々之を考ふるに婦女の職業は男子と全く同樣なるに至らざるも或る點までは同一の範圍に至るべしと信ずるなり又至るを得べしと信ずる也。

とあり之れ尤もの說と思はる然るに第九十一頁よは、

余輩は日本婦女をして男子と同樣の地位に立たしめんと欲するものなり男子と同一の職務を執らしめんと欲するもの也。

右樣の矛盾時として散在するを見る、但し其の廢娼論は隨分活潑にして面白く又交際論の邊も中々にシャレて見へたり其第三十九頁に、

富子孃、今日は女學雜誌の發兌の當日ですが未だ配達はしませぬか、ア、先刻配達してまいりました、御覽なさい今日の社說には「時勢の進步」と云ふ論が載せてあります、へ、ヱ一寸拜見致しましよふか、ナル程時勢の進步かと讀下せば、

時勢の進步ほど恐るべきものはあらじ……只余輩は此狀況が一變して以て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

今日の有様に至れるを視するもの也、見よ男女交際の道開けてより女子の勢力茲に擴張し、結婚の道改まりてより所云る淫奔の風消滅し、男女の情交切に其密を加へ先年行はれたる淡泊無縁の交際は已に今日之を見る能はず、男も女も各相共に愉快の光陰を送るに至りしにあらずや、之れ實に余輩が識者諸氏と共に歡賀するところにして毎に社會の爲めに視する所なり、蓋し時勢の進歩之をして然らしめたるものにして社會風潮の大勢以て今日の状況を呈したるに外ならざる也云々。

「成程これに違いない抔」と愉快の光川に掉さすの時機は余其の遠からざるを信ずるなり嗟乎余輩は世人と共に女學雜誌の社説が此の如くならんことを望むもの也又斯くあらざるべからざることを主唱するもの也。

女學雜誌の記者當人も亦た尤も之を望むもの也。

叢話

○からだの持方（其二）　加藤弘之述　社員筆記

日本の今までの模様と云ふものは飲食のことなどは實に不規則なるもので朝でも晝でも客があれば動もすれば酒を出したり又食事をしたり菓子を出したりします此等は惡るいことで斯る時でもない時に飲食などをしますから恰好の時がきても飲食することは出きません然るに腸胃にはチヤント極りがあつて消化の力も定まりがあるに今食ッたばかりに再び食うと云ふ樣なことがあれば腸胃は其働を十分にすることが出きなくなる自然にからだは弱くなるのです夫故不時の客に酒を出したり飯を出したりなどするは宜しきことではありません始終日本人の客を取扱ふは斯ふ云ふ風習になつて居るから大に害を及ぼします起臥も又定りが無い稀の事は仕方が無いとして判に押した樣には何も乎も徃きませんが出きるだけは規則を立て丶從はなければなりません丈夫のからだの者が時に病を得て死ぬる樣なことがありますが是れ自分の丈夫なるを常に恃んで不養生するからです少しからだの弱い人は却て要心して飲食も正しくするから割合に長壽する樣なことが出きます此事に就ては私は自分に經驗があると思ッて居る私は一躰ソンナに強いからだではありません別に弱いと云ふこともなかつたが強くはありませんでした然し書生の内にはシダラは迚も出きなんだが飲食起臥には時を定めて大變食過ぎたり飲過ぎたりすることは出きるだけ爲ん樣にして參りましたから割合にからだが早く衰らなかつたかと思ひます大病に罹ッたことは度々ありますが不養生から起つたと云ふ醫者の説もありません何か惡るい所から起りましたらうが飲食の度を過したとか毎日かゝる不養生だから起ッたとも言はれぬ所から見れば飲食起臥より起りたる病氣とは思はれません若し是れで私がフシダラであつたならば恐らく今日まで生きて居ることが出きなんだらうと自分で考へます夫故自分で少し經驗がある積りです且つ醫者や衛生家などの言ふことを聞てもからだを持つには規律を正しくしなけ

ればならんと言はない人は無い常に大食し常に大酒を飲む人は定りの無い人より好いと云ふヿですいゝと云ふ譯ではないが大酒大食と腸胃がきまつて居る方が害が少ないと云ふヿでムラ食をしたり又飲む時は大層飲み飲まぬ時は一滴も飲まぬと云ふ樣に規則の整はぬのが一番惡るいと醫者の說でも此通りであります。

毎日々々規則を立てゝ食事の時も起臥の時も凡そに定め其外の仕事も出きるだけは定めて差支のあつて出きぬ時は仕方が無いからそれは已むヿを得んとして毎日々々規則に從ふ樣にシダラある樣にしたならば相應にからだを保つヿが出きやうと思ふ一躰に弱い人ならば幾ら其樣にしても八十までも九十までも生きられぬと云ふヿは當然で御座いますけれども弱い人が不シダラを癈めたならば五年は十年は持直すヿが出きやう又強い人が不シダラを廢めたならば八九十までも生きられ樣然うして見れば弱い人でも強い人でもからだの持方を不シダラでない樣にするヿが肝腎であるに相違ないと思ひますから夫レ丈ケの事を私は今日御話する積りで居ッたのです何も知らんから仕方が無いが西洋などで長壽をする有名なる人の傳を讀んで見ると大抵今日のからだの持方がシダラの好人で

不規則のからだの持方をした人は少ないです且つ西洋人の風は一般にシダラがいゝ惡るい人も有りますけれども善い人が多い自然に早くから衛生の話などが開けて居るもんですから斯一般に規則が正しいかと思はれます然しながら日本でも女では無いが德川家康と云ふ人の話しを讀めばア、云ふ豪傑でも今日の仕事はチヤント小供の時から能く規則の立た人で飲食の事でも起臥の事でも平生の仕事も渾て定りがついて居た戰國の世の中で毎日戰爭ばかりあつた時だから然うも往きますまいが出きるだけは規則を守ッたと見へて他日天下を平げ七十二歲まで生きたのです夫れから佛蘭西のナポレオンと云ふ人は日本では秀吉とでも云ふ樣な非常な豪傑で滅多に世の中に現はれぬ程の人であつたから自分のからだ杯には構はぬ人であつたらうと思ふに此人は餘程からだの持方に規則を立てゝ毎日の行は少しも其規則にはづれたヿは無い此人も戰さばかりして居た人だが能く規則を守られた人には違いない其外にも例は澤山にありませう日本にもありませうけれども近頃獨逸の學者でランケと云ふ人は昨年九十歲で死にましたが其れまでは何も平もきまつて居て至て丈夫で其死ぬる病氣の前までは毎日午前九時前に食事して九時から午後の一時までは

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本を書き一時になつて仕舞て食事を爲し少し間を置て三時過ぎから外を歩るくとか馬に乗るとか九十になるまで夏でも冬でも運動に出かけ夜になつて歸て七時か八時頃に食事を爲し九時から復た本を書て夜中の午前一時まで勤めてそれから寢に就て翌日の七時か八時まで寢るので御坐いました此人は夫ればかりするので何も外に用はありませんが此規則を守つたのが長壽をした原因の一部分にあつて居るに違いない若しヲンゲ先生が飲過ぎたり食過ぎたりしたら何うだか最う少し早く死んだかも知れません斯う云ふ例は御婦人の中にもありませうが分りませんから御話しするとは出きません。

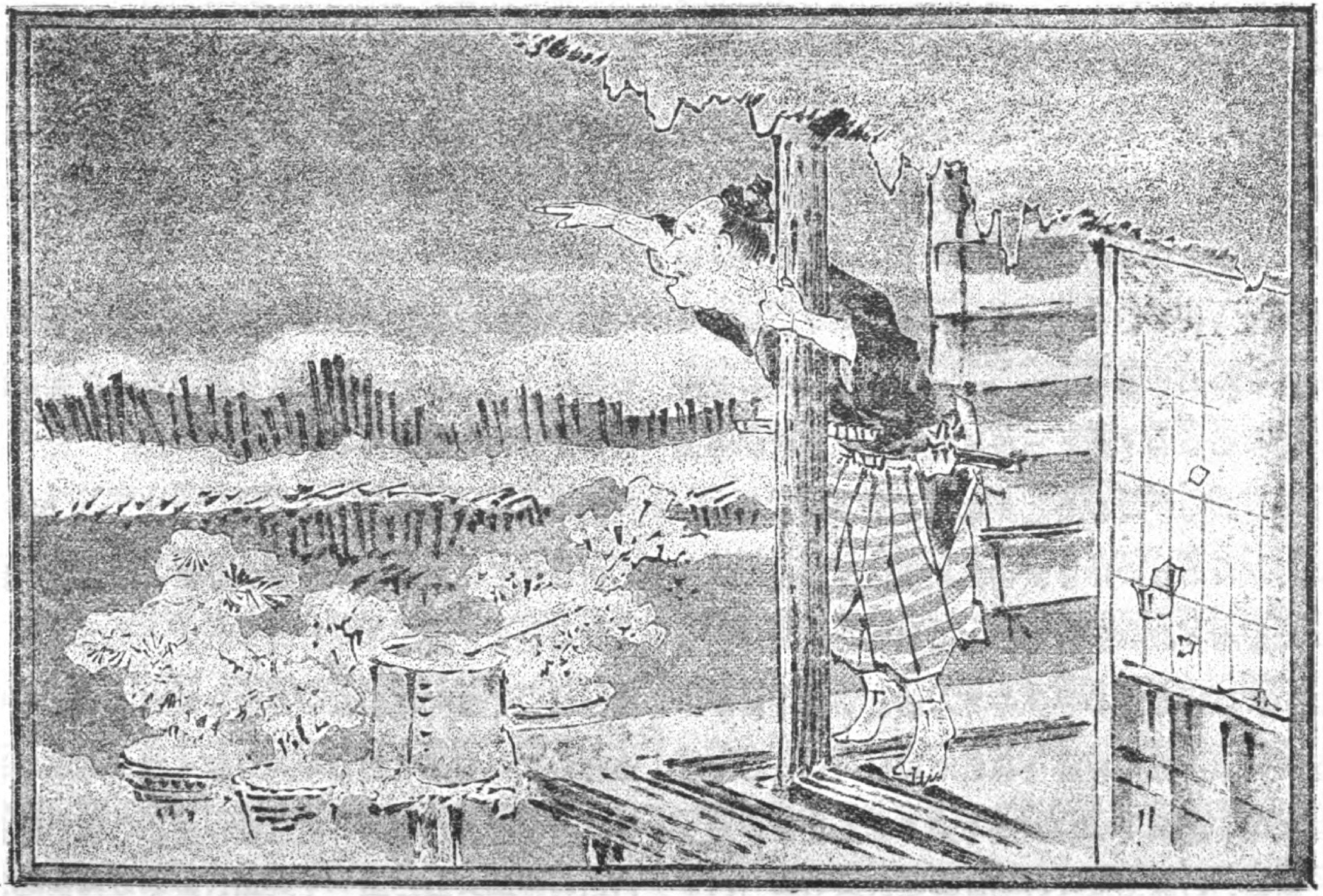
然しながら或は人によつてソレは宜からうが併し出きるものでは無い道具の様に死んだものでは無いから規則を立て一生徃くとは出きん長壽ばかりしても詰らんから少しは不規則のとをしても好と云ふ人が無いとも言へないあるで御座いませう然う思ふ人は仕方が無いが其人に向て愈よ夭死しても搆はあいか死ぬとは嫌いでは無いかと念を推して聞けば然う言う人でも死ぬとは好である嫌ひでは無いと云ふ人はあり升まい稀に自殺する様な人もありますけれども之れは死ぬのが好きの様ではあるがしかし已むを得ないで死ぬのもあり狂人とあつて死ぬのも有る普通の人なら足腰も立たず用便も出きぬ様な八九十の翁さんでも媼さんでもお前死ぬのが好きかと問はゝ好きとは言いますまい時として死にたいと云ふ考も起るか知れんが其本心を尋ぬれば決して死にたいとは思はぬであらうと察せらるゝ斯く死ぬと云ふとは人間が嫌いであるに相違ないとして見れば一日でも永く生らるゝ様に要心するのが必用で要心しても死なゝい譯には往きませんが其死ぬる時の伸るには相違ありません一日でも永く此世の中に居りたいと云ふ情は人間誰れにでもあるには相違ない生きたいとは生きたいが養生するとは厭だ不養生してシダラ無くして永く生きたいと云ても是れは六ケしい注文で仕方が無いそこで永く生きたい心と不養生したい念と天秤にかけて重い方を取るのであるが千人の中一人も不養生の方の重いものはありません果して死ぬが厭なれば之を延ばす考をしなければならんが此シダラのある人が一人でも餘計出きれば則ち日本の幸福であるが若し之に反したならば日本の不幸であるのです。

○正行固く辭す　　　　　一のぶ

むかし南朝の時辨の內侍と云へる宮女ありけり才色雙ながら美く忠誠の膽おさ〳〵丈夫に劣らず當世第一の佳人にてあり

○佐野の源左衛門

いかにあれなる旅人、鎌倉同勢の上るといふはまとか、何おびたゝしく上る、さぞあるらん、東八ヶ國の大名小名おもひ〳〵のかまくら入、さり見事にてり候覽、白金物うつたる糸毛の具足にきんぎんを延たる太刀かたな、かひにかふたる馬に乘り、のりかへ中間きらひやかに、打つれ〳〵のぼるなかに、常世かつねにかへりたる、馬物のくやうち物の、ものそのかずにあらさる粧ひ、さうわらふらむさりながら、所存は誰にもおどるまじと心はかりはいさめども、いさみかねたるやせむまの、あら道をそや、いろけども〳〵よはきによへき柳の糸の、よれによれたるやせむまなれは、うてどもあをれどもさきへはすゝまぬ、足弱東の乘ぢからなければおひかけたり○いかに誰かある。御前に候。國々の諸軍勢は皆々來りて候か。さん候悉くは せ參じて候。其諸軍勢の中にいかにもちきれたる腹卷を着、さひたる長刀をもち、やせたる馬を自身ひかへたる武士一騎有べし、なたへ來り候へ。畏て候。



"A Light which nevir was on sea or land-Imagination and the Poets' dream.

ける高の師直之に掛想し使を遣りて欺き出し途にて之を奪はんとす此時正行通りかゝりて暴人を追ひ散らし難なく内侍を救ひて宮に送りかへしぬ天皇御感斜めならず内侍を下して正行に賜ひ其妻と爲さしむ。

時に師直師泰等尊氏の命を受けて大軍を引率し京師を出でゝ正行を撃たんとす正行弟正時及び一族を率ひて吉野の行宮に詣り謹んで奏して申すやう臣が父正成湊川に戰死の折り臣年わづかに十三歳天資不肖の身には候へども當時の遺訓骨髓に徹し國家の御爲めに賊を討じ上みは叡慮をやすめ奉り下も亡父百年の遺恨を晴らさせたく之れより日夜忘るゝと候はず然るに此度師直等大擧して來り候よし此役臣が劍を以て彼等が首を貫かずば死すとも止み候はじ仰ぎ願くは一たび天顏を拜して御暇玉はりたしと、天皇乃はち南殿に御し簾をかゝげて引見し仰せらるゝようは乃ぢの父忠勤無雙なりしに不幸にして果敢なくも打死せり今ま朕が賴む所ろは汝ぢ一人なれば宜しく朕が股肱と爲つて惡賊を平らぐべし然れど萬一軍もし利あらずとも必らず死を決して戰ふ勿れ汝ぢにして亦た死せば朕は之より何人をか賴まんとて袞龍の袖かき合はせて打泣かせ玉ふ、正行恐惶して涙を拭ひて退き先帝の廟を拜して一族百四十三人の性名を如意輪堂に記し三千餘騎を率ひて馳向ひける。

此時正行凄愴として既に決するところあり其の梓弓はまた引きかへさじと思ふ身の何すれぞ束の間の縁に一夜のなさけを凝め佳人百年の前途を哀しくするに忍びんや心すでに内侍を愛し氣すでに其の忠誠の情を嘉みす余れもし太平の世に生れて太平の家に住まば亦た何すれぞ之を棄てんや然れども此の眞實なる愛情は今ま則はち正行の心裏を冷ならしめ遂に固く辭して内侍を受けず一首を賦して奉る、

とても世にながらふべくもあらぬ身のかりのちぎりをいかでむすばむ」嗚呼正行は眞に情を知るの武夫眞によく其の愛人を愛するの丈夫なり。

○婦人禁酒會

安部磯雄　述

左は岡山基督敎婦人禁酒會の席上に於て安部氏が演述ありたるものゝ筆記なり。

西洋にては婦人禁酒會と申者が盛に行はれますが我國にては西洋と少し風俗が違ひまして婦人は先男子に從はねばなりません故に自分はあまり酒に酔て歌ひつ舞つ夢中になつて騷ぐことは御座りますまいが亭主の爲めには餘儀なく酒宴の相手

ともなり又心の中では早く亭主が酒を止めて呉れればよいがと思ふても口ではもう一杯めし上つては如何ですと御機嫌を取り其上ちよつと自分も盃を受けて其興を助くることもありて是非なき次第で御座りますされば我國に於てハ男子が先きに禁酒さへすれば婦人の禁酒は至て易く男子が酒を嗜めばつまり婦人の禁酒は六ヶ敷とじやと云ふて禁酒會などに加はらぬ御方が御坐りますこの御説は至極御尤で御坐りまして私も大に其處に思ひ當る處がありますから今晩は無理に御婦人方に向て禁酒をなされとは御勸め申しません唯今より暫くの時間を拜借して早く男子の酒を止める樣に御盡力なさることを御婦人方に御勸め申したく思ひます如何にして男子が酒を止める樣に御盡力なさつて宜しきかは段々と御話し申上ますが先づ其始めに酒は御婦人方の大敵であることを言はねばなりません世に御婦人方ほど幸なるものはあるまいと私は思ひます、なぜなれは若し婦人にして生れながら容貌の美はしければ餘り學問もせず發明にもなく又多くの苦勞をもせずして一足飛びに位の高き御役人の奥樣と仰がれ玉の輿ではないが黒塗の馬車に乗り綾錦を身に飾ることも出來ます然し又世に御婦人方ほど不仕合なるものは御坐りません若しつまらない亭主に從ひますれば一生の間身に襤褸を纏ひ三疊敷の小屋に住み時によれば餓に迫ることもあります誠に御婦人方の身を考へますれば彼の白樂天が申せしが如く百年の苦樂は他人によりて定まるとで御坐ります。

今世の中を御覽なされば種々悲むへき憐む可き事が御座りますがそのなかにて親子の愛と夫婦の愛を引き割て不都合を來す程歎かはしき事はありますまい今皆さんに一つの御話を申しませう此處に夫婦と小兒と至て睦しく暮す一家族があります然るに不圖したとより亭主が他の女に思をかけ追々と身代を遣ひ果し、はては愛すへき妻に衣服も與へす愛すへき小兒に食物をも與へす全く女の爲めに迷はされました、さらは彼の妻と小兒はこの惡しき女をどんなに思ひましよう必ずこれを仇の如く思ふて惡むには相違御座りませんそれと同樣のとでありますが世には酒と申す惡しき女が御座りまして皆さんの御亭主を迷はし終には毒氣を吹き込みまして斷ち難き親子と夫婦の絆をも切らせ妻か寒さに苦み小兒が餓に叫びましても少しも頓着させぬ樣になりますこれ全く酒の業でありますれば皆さんこれを仇とは思ひませんか。

又御婦人方は一心に我夫の事を思ひ貞操を御守りなさるのに

男子はウハキとでも申さうか我盡勝手とでも申しませうか我妻の前をも憚らす婬樂がましき事を言ひ甚だしきは他の女に思を運はす樣な事は世間に多くあるとて御座ります又之を譬へて御話し申しませう茲に夫婦ありて亭主は石部堅吉とでも申すへき中々堅氣な人でありましたが近所に極々奸智に長けたる老婦が居りまして折々この亭主の心を亂し終に折を窺ふて他の女に引合せました所が常に愼み深き亭主も此老婦の術中に陷りて深く此女に溺れました若し妻が此事を委しく聞きましたならば如何思いませう素より彼の女を惡みませうけれども堅氣なる亭主の心を亂したる彼の奸惡なる老婦は之を仇の如く思いませう皆さんよく御考へなさい皆さんの御亭主を迷はす女も惡むへきではありますが其心を亂したる老婦とも申すへき酒は皆さんの大なる仇ではありませんか斯く申せは酒は第一皆さんの大切なる御亭主を迷はし次には皆さんの愛し玉ふ小兒さんと又皆さんをも苦むるものなれは實に赦すに赦されぬ大なる仇で御座ります然るに御婦人方は猶其仇を赦し甚だしきはこれの贔負をなさるではありませんかこれは恐れながら皆さんの御了見違ひて御座りましよう。（未完）

"Good thoughts are no better than good dreams unless they be executed."

小說

○都鳥

石橋忍月

第一回、是ぞ浮世の誠なる（上）

春の風ぬるみし空に猫の毛雨、降つて樹葉を濕せど軒、滴を垂るゝに至らず路、足駄を穿つに及ばず清明の風光を賞づるの餘り重來の春なからざらんとを惜むの客い清遊を汚す塵埃を拂ふの最好道具とて却つて是れを喜ぶあり、雨に命の洗濯させて花よ心の憂晴しと墨陀櫻雲の間に棹すの風流人もある可し晴好の景吾れ既に之を訪ふ雨奇の景吾れ未だ之を見ずと小金井に遠乘するの紳士連もある可し海棠は輕雨を含んでこぼるゝ色香を掬ひての少なきをすね、黃鸝は自己が晴衣の濡るゝも厭わず褒められたさが一杯に嬌音を弄ぶ人の心を浮立せ人の足をそびき出すと云ふ好時節どこもかしこも花の噂とり〴〵の中に挾まる上野花園町の一構え家賃一月五圓と聞けば其結構の壯大に非らず又裏店の伏屋にも非ざるとを知る可し入口に園井波之助と書き現した小さな名札、構子戸、上り口とも雜巾能く行屆き隣家の埃に晒らされて艶氣なきと比ぶ可くもならず」下婢にあらずお孃樣とも見受け兼る一人の乙女、この内には、せゝなげに咲た杜若、よい床へ生たいのふ、い

イどなたも左様におッしやります自慢で作ッて置きましたれど近頃ハ手入が惡さにいかふ田地が荒ましたと伊賀越の平作がゐたならバ言ひさうな風躰なり、乙女は奥の間より臺所、庭の洒掃ランプの洒掃までなし終りそれで休息するかと思へバさにあらず、某學校の講義録とも覺ぼしき物の本をくりひろげ一心不亂になッて默讀す、讀ンで央に至りフト感ぜしとあると見え頭を擧げて靜思瞑目、暫くして立上り編み掛けた毛糸の靴足袋を取り出し又も一心に編ンでゐる折しも奥の柱時計時を報ぐると同時に森を隔てし停車場の滊笛ピユウ、ピユー

乙女　チヤ、モウ十二時だワ、あんでも此を早く編ンで旦那を驚かして上げやう、色の取合せがよく出來たッて褒められるやうに。モウ追ッつけお歸りになる時分

と奥の間の火鉢に櫻炭を插け、新聞を奇麗に疊ンで机の上に載する暫くして鐵瓶はシイン〳〵と微音を弄す、サアいつでもお歸り遊ばせと誰れ言はねども人待顔

乙女　モウ雨も晴れたやうだ。さう〳〵お隣りの叔母さんが花をやらうとお仰ッた今の中に貰ッて插けやう

不忍池の畔道より廿四五の年配なる壯年右に二三冊の洋書を携へ歸りくる途すがら

ア、しまッたけうの卒業試驗の三番目の問題。しくじッた考え違ひした流通資本と固定資本との關係……產業社會……ア、誤解した、しかし悔んでも今更追ッつかない

と何か獨りつぶやきつゝフト池の方を眺めフヽッと笑ひ出した口を中途で打ち消して春の野面に群る蝶、道の伽する芳草を踏み分けて來る格子前。花の折枝持そへて見合す顔。乙女は急いで上り口丁寧に兩手をつき頭を下げ

お歸ンなさいまし

奇麗な花だ子。隣りから貰ッたのか

と云ひつゝ主人は自己が居間に座を占め新聞を見乍ら四邊を見廻し

おれが一昨年下宿してゐる時分ハ座敷でも机の上でも丸で埃だらけで五六日も洒掃なしで……こンな秩序よくなッてる日ハ半時もなかッたが。女性は眞に家の光澤だ

との感觸」既に晝食も濟み徒然慰む言葉敵

波　お八重さん、おまへには誠に氣の毒だ子

八　何故で御座います

波　何故ッておまへ、阿母さんハ國元にお歸ンなさるし、そ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れから間もなく婆やがあんなに病氣で里に歸てゐるから、お前一人で此節大變に用が増えて勉强もすることが出來なからうと思ふからサ、今迄が淸原家の樣な大家に仕へてゐて私の内に居ッたら嘸かし辛からうと思ッて

なンの郎君勿躰ないと、お内にお世話になりましてから皆樣の御親切で大層身の爲に……此位な御用を勤めますのハ微塵も厭ひは……そりやア淸原の御邸にも妾ハ色々お世話になりましたけれどッイお孃樣に出過た、アノ生意氣な口所きましたので御免よなり、それからアノ難儀の場を郎君がお助け下すッて、郎君は妾の爲めに左のお手をお怪俄（と少しうるみ聲になる）其御恩を……其御不自由をお察し申せバ縱令火水に這入ッても……妾は郎君のお手を見る度びに、一生不具の御方になしましたと思へば………

と思はずポロリと涙一雫、凡そ人世あるとあらゆる涙の中に就て最も淸潔なる最も深切なる眞心を含み生命の藥殖をも猶ほ許す程の價値あるの涙ハ如何なる涙なりや問ハゞ此憐む可き一滴なりと答ふるとも敢て過言に非る可し

"Every time I take it up, I seem to take it up for the first time."

○小說神髓　（第一篇）

蘇格氏著ケ子ルヲルス　（第七回）

女王陛下より賜わりたる侍醫とはあれど今ま中途に之を覺まさせたらば一命にも危うしとの注意ありたる義に付侯の側役ラレー出で迎へて其由を告げ最と淡泊に之を斷わりて返へしたり然るに翌朝と爲りて侯は最と淸々しき躰にて起き出で長々の病氣忘るゝが如くに覺へて甚はだ快ちよげなり但だ女王より忝じけなくも御使ひとして賜わりたる侍醫を最ともすげなう返し參らせたること何よりも恐れ多し早々に其罪を謝せずバ相成まじとて則ちブラント及びラレー等を使ひとし直樣陛下へ御わびとして遣ハしける。

ラレーは後ちにサー、ヲーター、ラレーと申して女王の寵愛一と方ならず其の頓智思付の斬新なるを以て後代に迄で名を殘したる名士なるが此時ブラントと共に宮殿への使者と成り船に乘りて參りたるが恰も是れ陛下舟遊の行幸あらんとするの折なりければ宮前の路の傍らに侍べりて之を拜しまゐらす然るにラレー等が跪まづき居る前面に少しの水たまりあり泥ぬるみて御歩ゆみの妨たげとなるより陛下之れを御覽じて偶と立留り玉ふ此時ラレーは早速の氣轉にて其の華美なる上衣を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

脱ぎ急に之を彼の泥の上に載せたりければ陛下は御靴をけがし玉ふに及ばずして恙なく通行あり船に召してより使にてラレーを召び寄せ忝じけなくも同船に入らせて近うさま〴〵の御物語ありけるラレーが陛下の御目に止まりたるは此時が初めてにて當時の處置は最と名高き佳話として今に至るまで人口に膾炙せり。

ラレーは元來甚はだ會話に巧みなれば此時最と面白く樣々の事を聞え上げたるが扨てサッセックス侯より遣はされたる御使ひの趣きをも甚だ巧みに言上し畢竟昨日侍醫を返し參らせたるは私しラレーの計らひにして主人事の一切預かり知らざる義に付願くは某を御心のまゝに罰し玉ふて主人への御叱りを許させ玉はんようにと申したれば陛下は龍顏反つて麗るはしく忠義の人の心にくさよと仰せあつて何の御咎がめもなかりける然のみならず侯の病氣左程までにとは思はざりしに扨ては定めし難義しつらん之より直ちに見舞に參らんとの御諚なれども豫かじめ何の御待受もせず特に主人事永の病氣に痩せ果てゝ御目通りいたすも心憂く覺へ候半其儀は平らに御猶豫を玉はりたく反つて大不敬の罪を侵すに至り申さんと恐る〳〵願ひ上ぐるに陛下は微かに御笑ひありてサッセックス侯は用心深き質にて平生の御つゝしみ一方ならずと聞く兼て申置かんには樣々の待受など反つて之を煩はすに均し今より直樣渡りて其樣躰を尋ねんとて中々に思ひ止まり玉ふ氣色なく遂に其儘に水夫等に命じて侯の邸へこぎ寄らせ玉ふ。

侯の邸内には騷動一と方ならず然れど先づ鳴りをしづめ敬しんで陛下を迎へ奉まつりサッセックス侯身をつくろつて見參するに陛下は最とやさしく之を慰さめ玉ひたるのち仰せあるようは君とレスター侯とは國家に大切なる二つの柱石なるものを近來ろ二人の間何となく穩やかならぬ交際の之れあるや宮中にても專らの評判にて朕が夙に心をなやむるところ也見かくるに病ひも大方は治まり候ようなり明日は二人ともに宮中に出仕せらるべし朕二人の仲に立ちて其交わりを元に復せしめん斷えて遲怠し玉ふべからずと仰せられ固く命を殘して還御せられぬ。

左れば其の翌る日は當時の二大有權者何れ劣らずして何れも劣るとを嫌ふ兩侯はそれ〴〵の臣下を率ひ定刻迄に宮中に出仕せらるサッセックス侯門の右に立ちレスター侯其左に立ち臣下左右に併列して各相對すれども何れか先づ禮せん彼れ先づ禮せは吾れ之に答へんとて双方にらみ合ひにて屹立したり

斯て陛下の御命とあつて兩侯各一人にて御入りあるべし決して餘人を伴のう可らず但しサツセツクス侯はラレー一人を召し連れらるゝとも差支へなしとあるにサツセツクス侯方の人々は早や十分の勝利を得たる如く最と時めきがほに喜こびたり。

佳傳

○婦人慈善會の看護婦

むかしベサンドボールが創立したる婦人慈善會に某と云ふ看護婦ありける重き傷を蒙むりて病院に入れるものありしに能く之をいたわり介抱して少さかも怠らず然るに此の患者の傷いなれだ痛みを覺へ苦痛に堪へずして毎々もがき苦しむとあり殊には平生粗暴なる武人にてありければ万事我儘にして人を物の屑とも思わず彼の看護婦に對しては常に失敬なる處置をのみ爲したれども夫人は毫も之に頓着せず常も變はるとなく介抱したり然るに或る時彼患者餘程に苦しげにて平生よりも氣色の惡かりければ夫人は早々に之を醫師に告げ水藥を請ふて持來り進めたるに患者は餘りの苦痛を忍ばんより寧ろ死するに如かずと斷念したれば中々に此を服せず夫人は辭ばを盡し理義を解いて倚ほ信切に之をすゝめたるに患者は乍ち癇癪を起し其の藥を取つて夫人の面てに投つけたり然れど夫人は靜かに瓶をひろいて再び醫師の許に行き温やかに事情を語りて再び藥の調合を乞ひ復た前の如く之を持來りて一層信切にすゝめたりしに患者は夫人を剛情ものと認め勃然として大に怒り瓶をもぎ取つてまたもや投げ付けたる水藥散亂して夫人の衣服を悉くうるをしたり扨て之にて最早すゝめはすまじ如何に剛情なるも程こそあれと獨りつぶやき居るとき夫人は前にかはるとなく又もや藥を調へ來りて倚更らに信切に居寄り御身もし今ま之を服し玉はねば一命覺束なしと云へり曲げて飲み玉へとて涙を落して瓶をさし出すにぞ亂暴なる患者も玆に初めて夫人の切なる愛心に感動し涙潸然として之ををし戴だき其儘に服用したりしかば日ならずして本服したりとなん、實に婦女子の愛情の信とある大率ぬ斯の如きもの也。

●寄書

文苑　鈴木弘恭大人撰

山家梅　石川ろく子

たまさかに人もとへかし山里のあやしのにはに梅のにほへば

同　古宇田淑子

尋くる人もあれとや山さとにあるじかほなるうめさきにけり

同　朝山千代子

梅かをるかすみのおくを尋ねきてみ山の里のはるを知るかな

同
世のさまも知らず顔なり山住の軒ばにはるをつぐるうめか枝　園池嘉壽子

同
よの事へよろにすぎゆく山里ものきばの梅にはるぞ知らるゝ　楠　正城子

田家梅
誰かやどか知らねとゆかしさく梅の花を主におとつれてみむ　太田きん子

田家鶯
咲梅へいづこならんと小山田にたづねきて聞くうぐひすの聲　伊地知千代子

鶯
春へきぬ梅へさきぬとうぐひすの知らせ顔にも鳴わたるかな　三枝せむ子

柳水邊
もえ出るきしの柳やけふるらん池のかゝみもくもりはてたり　廣瀬すゑ子

門柳
佐保姫の手ひきの糸をくりかへしひまなくな引門のあをやき　田邊あさ子

同
賤が家の門にぎはひてはるかぜになびく畑へやなぎなりけり　跡見せつ子

同
水さよき流れにかけをうつしつゝのどかになびくかどの青柳　秋元さは子

同
さほ姫の手染にそめしあを柳のいとくりかへす春ぞのどけき　松野鐵千代子

同
行人もたちよるかどの糸やなぎふかくもそめてくりかへす哉　齋藤　仁子

同
今さらに人待やとにあらねどもまねき顔なるかどのあをやぎ　平尾　竹子

同
いつのまに緑の糸となりにけむわが妹がすむかどのあをやぎ　武井やす子

同
我が門になびく柳をいとゝみてくる人もなきはるのやまざと　丹羽　花子

同
手すさびにむすびてぞみる我が門の風にみだるゝ靑柳のいと　永井てつ子

同
春風にあやおるばかりわが門のやなぎへ糸になりにけるかな　田中　榮子

同
うち霞みふくとも見えぬはる風にかどの小柳うちなびくなり　田村ます子

山霞
山ひめの衣と見ゆるあさかすみたもとゆたかに立わたりけり　三條　富子

同
春くれば妹背のやまのなかをさへあへれ霞がたちへだてける　跡見　桃子

同
見わたせば秩父の山もむさし野のゆかりの色にかすみ渡れり　櫻井たき子

同
さしのぼる朝日のかけのうするゝへ外山のかすみ深き也けり　太田　錦子

同
春の日の影ものどかに匂ふなりかすみそめたるひむかしの山　岡田　仲子

同
霞つゝかきけつ如くなりにけりきのふへ見えしをつくばの山　平尾　竹子

同
もろともに霞の衣かつぎつゝむつまじげなるちゝぶ甲斐がね　跡見　節子

●新報　(此欄内の記事は自由に轉載抄錄を許す)

○高等女學校

高等女學校々長箕作佳吉君其任を辭し大學教授理學部敎頭兼盲啞學校々長たる矢田部良吉君之に代わらる。そもそも箕作君は誠實に女子敎育の爲に苦辛せらるゝ所ろの學士にして高等女學校の爲に盡力せられたると尋常ならず同校が近年頗へかに隆盛の運に向ひ確かに獨立の基礎を固うし且つ家事敎場までをも設くるに至りたるは多くは是れ同君の辛苦に由るものなり然るに今ま一朝卒然として此任を辭せらるゝを見て吾人は實に一び奇しみ一び憾み大に安んぜざるものありき、然れども之を承はるに同君近來肺疾の患ひあり殊に理學部敎授の重任を負ひて發明研究の餘暇甚へだ少なきに際し高等女學校の校務益す手廣く相成るに付ては到底兼任の資格を以て能く其務を濟す可らさるを憂ひ甚へだ殘念の思切なるも不得止遂に辭職せられたるものと云へり則へち其の女學校長の任を重しとし其の理學研究を大切にするの精神遂に君をして如此く斷明せしめたるなり故に吾人は最も多く君の辭職を遺憾とするものゝ一人なれども此の情實を知るが故に敢て齊て同君を送る君希くは彌よ躰を壯んにして理學專攻の樂しみを恣せ、矢田部君は剛膽敢爲の人なり大抵の女學校々長は殆んど腦病を起す迄に心配すれども君は必らずや能く憂ひず果決斷行して飛離たる名案を施し玉へん君嘗て敎育會の演說會に於て

私は極不肖ではあるが卑見が無いでへ無い…… 若し私の生涯の中に私の所見に合ふとが行はれたら批評を請ふとも御座りませう精神と精神との關係の事は中ゝ述べる工合に行かん之を行つて見せなければ成らぬ(大意)。

と申されたるとあるを記臆す而して君は今ま其考案を實行し得らるべき生涯に會せり吾人は刮目して之を見んとを望むもの也。故に茲に謹んで前校長箕作君に多年の御辛苦たゞならざりしを謝し併せて新校長矢田部君に望むと斯の如し、蓋し高等女學校の一盛一衰は日本の女學上莫大の關係あるとを信ずるが故也。

○廢娼妓、植木枝盛氏の書狀

娼妓公許全廢の事は吾社が多年間主張して其實効の現へれんとを祈禱したる所ろ

なるが近來は追々と其の好兆を望むを得る快喜に堪へず殊に近日高知縣會に於て妓樓貸許廢止の建議案を可決したるより此方有の問題大に世人の注目する所となりたるは更らに又一つの尤も賀すべきと也。之に付き東京婦人矯風會よりは右建議案の出題者植木枝盛氏に禮狀を送りたるところ此頃ろ至り同氏より左の如き答書ありたりと云へり、

未だ清容にも接せざる小生に對し小生が曾て高知縣會議場にて娼妓公許廢止の事を縣知事に建議するの建議說を提出致すより幸に同會場の可決する所と爲り其の手續に及びたるを嘉揚せられ殊に芳札を投送せられ候段小生に於て實に涯り無き面目に有之候而已ならず亦本縣會をして無上の榮名を得せしめたるものと存じ申候舉竟娼妓公許廢止の議は小生に於ても數年前よりの宿說に有之是迄國內諸處徘徊致す中折に觸れては其說を唱道致したるとも有之又本縣下に在りては去ぬる十八年十一月十二月に跨り八日間の當地土陽新聞に小生の議論を掲載したると有之候得共當地新聞の如きは山間の一小新聞なれば敢て縣外の人にまで其說を傳ふるの力無之候處幸なるとには過般貌地の女學雜誌へ本縣會にて小生が陳述したる議論の筆記を登錄致され候に由り廣く大方諸君子の一讀を費るとと爲り洵に大慶の至りに存じ申候是れに就きては宜敷右雜誌社へも御傳發奉願度御賴申上候且又今回は貴會趣意書規則書勸告書等りれく御取揃の上御惠送被成下鳴謝致し候貴會の御精神は夙に遼聞叅察仕居候事に候得共今又それく御書類熟讀詳閱致し轉た感動を惹起し申候就ては右書類は悉く當地新聞に掲載致し度と存じ候處何分にも小新聞にて紙面甚だ狹隘に有之無據其意に任じ難く候ゆへ昨日發兌に相成候紙上へ縣下諸婦人又は男子にても右書類を一覽致し度特志の方々は小生の宅又は土陽新聞社へまで申越有之ば御望に循ひ是上可致との廣告を爲し置き候處已に五六人貰ひに參り候者有之孰れへも一部づゝ與へ置き申候又當地に於ては客年三月より有志の婦女達にて婦人交際會と稱する月次會を催ほし其後名目を改めて高知女子矯風會と云ひ現在も毎月第二第四の火曜日を以て集會致し居申候に付乃ち此方へも次の會日には差廻し可申と存居候先は御禮旁右の條々御報致度如此に御座候匆々不一

明治廿一年三月九日　　于土佐　植木枝盛

東京婦人矯風會

矢島かじ様

佐々城豐壽様

○佛者と女權論

僧侶社會に於て近來しきりと女學に熱心の兆候あり尤も喜ぶべき變化なりとして前號來たびく之を報じ特に彼の反省會の如く佛者にして禁酒の事業に盡力し且つ此の禁酒事業に尤も多く坊守婦人方の助けを要めらるゝを見ては佛者改良中の一大改良として吾人は尤多く之を賀したり、然るに女學雜誌第九十六號批評の部に反省會雜誌を評したる末に「佛教徒にして社會有益の矯風に從事す尤も喜ぶべし其の坊守奥方にして奮つて禁酒の美擧に馳加わらんとす更に喜ぶべし然れども吾人は女子輕蔑の大問屋たる佛教徒の仲間に至るまで既に斯の如く女性を優待するの氣運に達したるを尤も大に驚喜するもの也」と述べたる此の輕蔑の大問屋と云へる一句甚だ敬同雜誌記者の好まざる所ろとなり是迄で佛者に於て女子を輕蔑したる事實なきのみか左りとて教義に於ても決して其の事實を發見せずと辨ぜられたり吾人は普通尋常の佛教道に於て女を惡魔外道やしやの如くに待遇せられたるとを記臆すれども若しも其實然らざりしとならば致し方なし只たく專門家たる同雜誌記者に就き其の說明を細かに承るの外なきもの也、但し何よりも確かなるは近來にはかに佛海に女權論の勃興したるとなり吾人は即ち之を賀す。

○公論新報と婦人矯風會

公論新報中には其後もまたく婦人矯風會の事をいろくと書立るものあり、凡そ婦女子にして國家の惡風を矯めんとするは尤も喜ぶべきと也而して此の喜ぶべき善良の會にして若し其味を失ひ矯風の會反つて矯正せらるべきの惡事あらば即ち尤も發ふべきと也其の一言一發もつとも眞面目にして尤も謙愼厳肅なるを要す然るに公論新報寄書家の同會を罵つや滑稽猥褻の言葉を以て取とめなき瓢簞流の落度を記るし有るが如く無きが如く責むるが如く褒むるが如き中に陰然同會の事業に大妨害を與へんとす蓋し如此きは紳士の爲すべき所ろにあらず大方は彼の酒を禁じ煙草を禁じ娼妓藝妓を遠ざけんとするの目的に不贊成を表せらるゝ方々なるべし尤も悲しむべきものなり。

○小松宮高等女學校に臨む　去十五日小松宮殿下同御息所には澁谷大教正同伴辻文部次官案內にて一ツ橋外高等女學校へ臨まれ授業を參觀せられたり同校は兼ねてより生徒に割烹を教ゆるに付き親しく生徒に料理せしめて午餐を供せられしと云ふ

○養育院慈善會　前號に記せし如く東京養育院慈善會は四月廿日より三日間上野公園地內華族會館に開かるゝ筈にて會頭には高崎府知事の夫人副會頭には澁澤榮一氏の夫人が任ずる由

○婦人懇親會　土方子爵夫人其他の發企にて去る十五日麹町區富士見町の富士見俱樂部にて高知出身婦人親睦會の第一回を開かれたるに參會者四十餘名かるた圍棋などの遊興ありて退散は黃昏なりしと次會は來月十五日なりといふ

○東洋繪畫會　府下の同會にては今度京都博覽會場を借入れ來四月十五日より五十日間繪畫展覽會を開設する由

○成立學舍女子部　は今般更らに教場を新築し高等科、高等師範科、幼年科を新設し三島毅、イーストレーキ、平田玉子の諸氏を聘せし由

○日本赤十字社支社　同支社を各地方へ設くる筈の由なるが山口縣にては原同知事が熱心に贊成し其支社を山口本町に設置して其會員の數は已に五百餘名の多きに及びたりと云ふ

○浦和婦人會　同會は吉田縣知事夫人及淑女諸君の發企にて昨年中創立し爾來追

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

々盛に趣き毎月一二回集會し婦人の進歩を計るは勿論慈善の主義を以て該會發中より幾分かを節約蓄積し居りしが先達大火にて浦和驛大半燒失し中には貧民にて隨分途方に迷ふものあるに付き同會にては其救助の爲に直に蓄積金差當り二十圓を義捐せりとまことに美事と云ふべし

○女子夜學舍　佐州羽茂郡赤泊村小學校の訓導柴野萬平氏の發意にて同地有志家の賛成を得今度同學校内にて學齡外婦女子の爲に夜學舍を設け學科は簡易小學の課程に相當たるものにて傍ら裁縫をも教授すると云ふ

○洋服裁縫研究所　高松兵庫町の間島某と云へるは今度題號の如きものを設け洋服裁縫一切の事を研究すると云ふ

○婦女懇談會　愛媛縣香川郡佛生山市街へ奈良次郎氏の發起にて婦女懇談會なるものを設け禮儀料理英語裁縫編物等を教授研究する由

○婦人教育談話會　備前國邑久郡第五番學區各小學校長訓導の首唱にて去月十八日明治小學校に於て同會第一會を催ふし頗る盛なるヿなりしと

○女生徒の羽子板　紀州名草郡岩崎尋常小學校にては女生徒が休憩時間に鬼ゴッコの遊をなすは見苦るしき嫌ひなき能はざればとて數多の羽子板を買入れ各女生に附與し羽子やりをなさしむるヿにせしと云ふ

○神戸英和學校生徒　神戸英和學校の外國女教師某氏の知人に目下土耳其の一女學校に教授をなしおられ此程其人の勸奬によりてか同女學校生徒より傳道用に費ひし呉れられたしとて金三十圓を英和女學校へ送り來りたるにぞ同校にては取敢へず多聞教會に之を寄附し尚ほ右土耳其女學校生徒の厚意に報ひん爲め當方よりも送金なすこと然るべけれと教師の勸に從ひ生徒一同頃日來醵金のヿを始めしがそれも親々よりの仕送金にては面白ろからずとて勉學の餘暇毛糸編物束髮用の網細工等をなし之を賣拂ひて其代價を少しづゝ蓄積し居ると云ふ

○久留米婦人協會　筑前久留米の婦人協會は去月十九日開會し規則の改正役員の改撰をなし演說もありし由

○大阪女學校　にては去月廿六日卒業証書授與式を執行せし由其卒業人名は井上とら、岡部あやの、福井たみの、岡澤ひで、中村とよの五名なりと

○庄村婦人會　福岡縣早良郡庄村婦人協會は去月十六日開會し出席員六十餘名に及び發企者羽石藤次郎氏は懇篤婦人の心得を演說し規則を確定し役員を撰びしに會長に石松とく子幹事に宮崎ちよ子佐匠たけ子が當撰したり其主旨は婦德を進め女風を矯すにありて情誼を厚ふし質素を主とし毎月一回小會を開き學術研究談話等をなし又演說をも催ふし毎年一月に大會を開らく由十歲以上の婦人は入會し得ると云ふ

○大津婦人慈善會　は去月廿日大津商工會議所にて開設せられ來會者八十餘名にして一統同日午後一時より大津小學校に至り同女生徒の裁縫編物其他教育の模樣を臨觀し了つて會場に歸へり茲にて招聘せし京都同志社日野教師の演說あり頗る盛んなりしと

○子供のはなし

讀き手

或る時私は人煙稀なる田舍を旅致しましたが日影の歩みは早くはや夜は疲れたる足に追つきましたなんでも見當り次第に宿を借んと足の向ふまゝに進みましたが夕景の煙を籠めたる森の間に一軒の家か見ますこれ幸と其方に歩みましたに洋燈の光はガラス窓を通して照ランプの光の下には愉快そうな椅子が列べてあるこれはこの疲れたる足を待にやと其方へと進み無細工なる木の門を通り過其家の前に至まするとの可愛らしき小娘が入口に立私の至るを待面でありました時に大く猛しき犬が戸口に顯はれまして大きな聲で吠へスンデに私に嚙つかんと致しました時に小娘は和かな手を其犬の粗き毛の上におき低き聲にて虎や内に這入と申しました其聲は和かで其手は輕くありまして何となくやさしく見ましたが犬は其儘内に這入ました其代に丈高き荒男か來まして荒き聲して誰ぞと申ました私は初めから宿を借して下されと申すは申し兼ましたから「茲所より次の驛へは幾里ありますかと」尋ましたに「次の驛まですかと初に似合はぬ優しき聲にて十分六哩も有ます」と答ましたから私は「ソレハまだ遠ふ御座ります

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

私は旅人で御坐りまするが足は疲れて道はまだ遠く御坐ります若しなろうことなれば明朝まで御止め下されば誠に難有う御坐ります」と申しました時に彼の小娘の小さき手は彼男の肩の上に横わりましたと見へましたが彼男は「御這入りなされ一寸と室を見ましよう」と申しました其聲といひ其風といひ全く前の人とは異ひまするで怪しき程でありました彼の男は主人と見へ一室へ招しましたが其所には小兒も居り妻も居りました妻は暫し不審そうな貌付で私を見て居りましたが最と寒かに「内には客間がないから」と申しますと主人は深切に「サリトテ次の驛までは道も遠く足も疲れて居るにイッソ一間を貸して進ぜんか」と申します其折彼の小娘は何やら母に申した樣でありましたが餘り聲が低くて聞き取り兼ねました只其時和かなる手が其母の腕の上に横わりましたを見ました母の聲は忽ちに變り「誠よ道も遠ふ御座ります嘸お疲で御座りましよ狹まくは御座れどお構なくばお勝手にお休みなされ」と申しました私は先き程より彼の小娘の手は彼の天の使が持ちて居るといふ魔法の杖ではないかと計り不思議に思つて居りましたが其夜も家の中で始終不思議の事が見へます其明る朝私は出立致しましやうと思ひました時に主人は次の驛に用がある故馬を引きて行くから乘て行かんかと勸めらるゝまゝに馬に乘りましたがドーシタ故よか其馬は少しも歩みませぬ主人は怒りて幾ら鞭てども鐵の馬の如く少しも動きませぬ餘りの事に悴も來りて轡を引きたり鞭ち抔致しますれど少しも歩みませぬ時に「ソーシテハいけませぬ」と和かな聲の致しましたは件の小娘でありました馬に近づきますと馬は喜しげよ其耳を動かします小娘は其手を馬の首におきまして何やら低く申しましたが馬は直ちに歩みを初め最と健かに進みました昨夜よりの事といひ誠に不思議に堪へませなんだから私は道すがら其娘の事を主人よ聞きますと主人は只手短かに「彼は誠に善き娘でありますから誰れにても何物にても愛せられまするから」と申しましたソコデ私は彼の小娘の魔法の種を見付ましたこれぞ誠に此の小娘の内に在る心が其外なる手に顯はれ來ますからでありません實に人を愛し物を愛し善き事をなす程力の強いものはありません彼の猛き犬物事を知らぬ馬でも倘其言に從ふてはありませんか私は今皆樣に其小娘の名をお告申さんと思ひますれど殘念にも其名を忘れました誠にすまぬことでありますから假りに其名を「良き手」と申しましやう何ンと適當したる名ではありませぬか。

●女學雜誌第拾卷總目錄

丁數

●社說
○再嫁寡婦及老孀(第三)老孀とは何者ぞ　二
○世話俗言の勢力及女流自重の必要　二四
○姉妹の爲に慨歎す　四七
○吾人の意見を明にす　六九
○其二　九一
○日本の家族(一)一家の和樂團欒　一一三
○其二(日本に幸福なる家族なし)　一三七
○其三(和樂なき家族より起る害毒)　一五九
○其四(之を幸福にするの策)上　一八三
○其五(仝上)下　二〇九

●論說
○衞生のこうのう(加藤弘之)　五
○其二　二九
○金庫の秘訣(完)(木村熊二)　七
○生意氣の說(鈴木券太郎)　二八
○其二　五二
○品行論(加藤弘之)　四九
○其二　七四
○其三　九六
○女子の教育(宇川盛三郎)　七六
○其二　一一六
○父兄と女學校(色川國士)　一一八
○其二　一四三
○女子の感化勢力(鈴木券太郎)　一四〇
●
○婦人教育會の演說(師岡のぶ子)　一六三
○衣服のはなし(緒方正規)　一六七
○其二　一八七
○小兒の精神及び保護法、一)(擲　傲)　二一三

●批評
○孝女美談砂漠の花
○通俗理科叢談　八
○國學和歌改良論　三一
○詩人の春
○通俗理科叢談批評の正誤　三二
○開化小學女日用文例
○酒の害　一一九
(反省會雜誌
○婦女鑑　一四五
○東洋之佳人
○浮雲第二篇の褒貶(忍月居士)　一九二
○其二　二一六
○谷間の姫百合　二一七
○婦人教會雜誌
○結婚の技折　二一九
○以呂都女と女學雜誌

●叢話
○再曾の首を翹よ詭なんぢらの贖ちかづけば也　九
○早起の利益　一〇
○禮裝一斑表　一一
○謙遜の德　三二
○其二　五九
○東京婦人矯風會　三四
○一日衞生の注意(荻野吟子)　三六
○米國婦人禁酒會　三七
○女の字の解　五三
○日本現今の婦人(雪江女史)　五五
○文人記者の伉儷　八〇
○其二　九九
○和歌の德を實用したる佳話　八一
○八十七年間英國女帽の變遷　八二
○其二　一〇四
○習慣のはなし　一〇一

○子供の話と小說神髓との序　一〇二
○太閤の手紙　一二一
○家族の勢力　一二二
○其二　一四八
○淌去はなし(高橋おろか)　一二四
○其二　一七三
○其三　一三三
○官粉の害(糸の家主人)　一四六
○詠歌論(佐々木縫)　一六七
○ロイアルホロエー女子大學の演說　一七〇
○はかなき愛　一九四
○會話の心得　一九八
○某伯爵夫人の手紙　一九九
○萬國婦人禁酒會員の請願　二一九
○御身の務め　二二一
○生死(上)　二二二
○百人首一口話(一)(鈴木弘恭)　二二三

●小說
○奔彪榮華の夢○奔府の二紳士　一二
○同○奔府の二紳士の二　三八
○同○花賣娘　三九
○同○花賣娘の二　六二
○同○花賣娘の三　八八
○同○雅匈人の述懷　一〇五
○同○雅匈人の述懷の二　一二五
○同○雅匈人の述懷の三　一四九
○同○埃及の亞伯領西　一七四
○同○愛西士の殿堂　二〇〇
●白蓮詠○今時の若いものには困るく　一五
○同○女の學者にも困るく　四一
○同○吉田魁き鈴木彌正　八五
●小說神髓○蘇格氏著ケ子ルオルス(第一)　一二七
○同○其二　一五一
○同○其三　一七六

○同○其四　二〇二
○同○其五　二二四

●佳傳
○クレク夫人の傳　一七
○マダム、デ、スタルの退去　一八
○[illegible]、夫に代つて死する事　一九
○レデー、ブラッセー　四二
○フリムピア、モラタ小傳(一)　四三
○同(三)　一五三
○同(四)　一七八
○イスター、デ、ホウシ夫人
○マダム、イリサベスの傳(長谷川峯子)　六四
○其二　八七
○其三　一〇七
○マダム、デ、スタール　一三〇
○小式部內侍の話　一三一
○女子教育の率先者エンマ、ウノルラルド夫人の事業　二〇四
○パーリート、ビーチヤア、ストノ夫人　二二六

●寄書
○年の終りの安息日(しのぶ)　二〇
○中島俊子女史の詩
○愛他心の蒔附(澤邊しげ子)　四五
○春を祝ふて思を述る(神田剛)
○開校式の文(飯島しげ子)　六六
○文苑(鈴木弘恭)　八九
○同　一一〇
○新年の骨牌(和崎義路)
○佐藤貞子傳(菊池純)　一三二
○初空梅見月雜咏(あやめ)　一五五
○加藤先生の品行論を讀み微意を陳す(安西りき子)　一五六
○文苑(鈴木弘恭)　一八〇
○相撲國弊風の汚穢速に脫却すべし(安西りき子)　二二八

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

●小供のはなし
○一つ目の婢 一三六
○ハイ〳〵とタンイマ 一五七
○悲哀の家來二人(一) 一八一
○同(二) 二〇七
○不思議の新衣裳(上) 二三九
●宮中錄事
○歌御會始○皇太后宮御誕辰 八九
○皇后陛下赤十社病院へ行啓御摸樣○華族女學校行啓 一一〇
○勲章御佩用 一五六
●新報
○寶冠章 四五
○跡見女學校 四六
○婦人衛生會雜誌○高知にかての一怪報 六七
○大日本婦人教育會 八五
○大日本私立婦人衛生會雜誌 一一〇
○福岡婦人協會○僧侶社會の女子教育○娼妓教育會 一三四
○公賣淫廢止建議 一五六
○唱歌、雜誌、美術 二〇六
○婦人矯風會 二三八
○津田梅子島山啓兩氏の叙任 二一
○中島湘烟女史 四六
○羽倉權命婦の逝去○伊澤峰子○香川志保子の叙任○佐野常民氏の美術會々頭 六七
○井石滿江子 一一一
○伊澤修二氏の音樂學校長 一三四
○大隈伯爵夫人の面接時間 一八〇
○税所篤子の昇叙 二〇六
○中島俊子の移居 二三八
●日本赤十字社役員○日本赤十字社集會○日本美術協會の役員 二一
○淑女以文會の發會○大日本婦人教育會 四六
○日本美術協會○淺草石濱婦人會○レース教場受驗生 六七
○婦人教育會の發會 八九
○日本唱歌會○大日本美術協會の委員 九〇
○慈恵院看護婦卒業授與式 一三四
○東京唱歌會 一三五
○赤十字社の功勲徽章○締盟共進會 一五六
○女子教育奬勵會の學校○演藝矯風會の發會○婦人矯風會の雜誌○哲女館の新設 一八一
○美術展覽會の開期○感化慈善會の設立 二〇六
○東京女工會新設 二二九
○横濱フェリス女學校の和漢學卒業生 二〇
○東京美術學校の位置 九〇
○傳學校 二一六
○京濱女學校の景況 二二九
○宮城英和女學校○高田女學校○大阪產婆學校の役員 二一
○廣島高等女學校○神戸女子手藝學校○神戸英和女學校 一一一
○鳥取縣私立女學校○德島高等女學校 一三五
○仙臺女子職業學校の設立○堺區立女學校の設置 一五七
○熊本濟々學校女子部新設 二〇六
●產婆講習所の設立 二一
○津山幼稚園○前橋の清風會 四六
○佐野婦人手工會の設立○京都婦人唱歌會の初會○長野師範學校女子部創設 六八
○熊本基督教婦人會初會○高松女子愛敬會の新設○愛媛婦人慈善會○三重縣の婦人交際會設立○清貞會開業式 一一一
○上毛婦人教育會○女學振起會の設立○佐渡女子學會の創立
○稲井縣製絲傳習所 一三五
○大坂孤児院○新潟和洋裁縫會
○高知婦人懇談會及夜學會○小田原女子學藝館○秋田婦人謝德會の設立○大津婦人慈善會の景況 一五七
○京都美術談話會 一八一
○石川縣新古美術展覽會 二〇六
○福岡女教員養成所○松山婦人慈善會○佐賀婦人矯風會○越後の婦人談話會○長岡婦人救世會○秩父婦人會の創設 二〇七
○高知貴風會及女學校○德島の女子矯風會○鳥取婦人會○大坂婦人風俗改良會○大坂綜藝種智院設立 二二九
●金澤の機織業及工女の數 四六
○婦人大和製服○圖書館の婦人席○結婚媒妁の統計 七
○製絲講習工女の行爲○鳥取縣製絲景況 六八
○臍帶切斷法の改良 九〇
○產婆開業免狀○任留外國婦人の數○内外人結婚の數 一一一
○一月中版權書目 一一二
○宮内省の美術擴張○群馬縣會の婦人席 一八一
○家庭教育の相談 二〇六
○寶冠章の雛形○郡長婦人を合す 二三九
●海外女事
○日耳曼の一職業學校 二一
○ポストン婦人教育及職業同盟會 二三
○通俗學藝雜誌の編輯人○あなた程の男はある○女子躰操場
○女編者○離婚統計 六八
○婦人特許の頒設○婦人傳道會
○婦人職業同盟 九〇
○ニウハム女大學の景況(二) 一一二
○其二○衣服改良會員書を我國皇后に奉る○卒業の女醫○婦人の犯罪者 一三五
○女子投票權○ビスマーク一婦人を恐る 一八一
○米國女大學○英門女友會○馬島錦姿令○日本婦人慈善會○女子の學位 二〇七
○日本皇后陛下○五十年祝祭の捧呈金○三萬人の婦人の願書 二二九
●圖畫及附錄 號數
○クレーク夫人の肖像 九一
○ブラッセー夫人の肖像 九二
○ホウシ夫人の肖像 九五
○英國女帽變遷の圖(一) 九四
○同(二) 九六
○公賣淫廢止の高知縣議事 九七
○英文日本の女況(島田かく)
○交詢案内新設の事 九八

其他録識節美なる図畫を挿む又珊瑚の玉なる欄ありて東西古今將析の文辭詩句の女學に關する最も美はしきものを抄出して集めり

Name

女學雜誌第百二號明治廿一年三月廿四日刊附錄

編輯兼發行人 巖本善治 印刷人 森田思

廣告

交詢案内

●雇いたき方（甲）

一 機織 府下にて十二三より以上の女を數百人機織に雇ひたし（神田紺屋町十一番地福原方）
二 學婢 十七歳以上にして小學校卒業同等の學力ある者にして三ヶ年入塾して差支なきものを試驗の上雇ひたき學校あり
三 家婢 十五六歳の者小間遣に雇たきものあり尤も毎日外國女教師に附け一時間宛英語を學ばすとのと
四 家婢 十六歳より二十歳位の間にて柔順なるもの雇ひたきものあり餘暇を以て讀書筭術習字裁縫等を教ゆと云ふ
五 家婢 年齡廿歳位身元慥にて正直に臺所を能く働くもの一人一圓五十錢位にて雇たきものあり
六 乳母 家族八人にて主人は醫學生基督信者の乳母を雇ひたきものあり

●雇はれたき方（乙）

一 教師 師範學校女子部の卒業生にして府下の何方へか教授に行きたきものあり
二 畵師 洋畵の女教師と爲り得るものあり廿才前後時間多からずは女學校の教師となりたし
三 奉公 年頃廿一裁縫及び家庭の事を知る爲め無月給にて府下にて可成基督信徒の家へ雇はれたきものあり漢學英學も少し出來るなり
四 學婢 年齡五十七歳の婦人にして書畵歌琴三味線裁縫を心得居り女學校留守居樣のものに雇はれたきものあり給料は己れを糊するだけにてよろし
五 學婢 學問篤志なれども學資に乏しく困窮する十四才の田舍娘にて讀書すべき余暇さへ得れば無給にて女學校などに雇はれたきものあり
六 奉公 地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇はれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

交詢案内新設の事

女子に職業を與ふるとは當今甚だ緊要と存じ候ところ世に在る慶安と云へるものには弊害尠らず又た高等の人々は周旋の便利すこしも無之甚はだ殘念と存ず因て吾社は此度餘暇を以て此等の人々の便利を圖り今後此の廣告欄内に交詢案内の一部を備え置き女子職業に就くの都合を計り度希望せり

交詢案内の規則

此案内は吾社員が餘暇を以て致すとゆえ手數料等は一切申受けざるは勿論なり左れば依賴の人々も決して催促がましきとを申越されざるよう豫め願置候事

女教員、うば、こしもと、奉公口、其外さま／＼の女の職業に付き雇ひたしと思ふ人及び雇はれたしと思ふ人ともよ其由を細かに申越さるべし吾社は之を次に記るす如き躰裁にして無名にしてたゞ番號を付し廣告すべき事

雇ひ主及び望み手は此の廣告を見て第何號の口へお世話ありたしなど勝手に申越さるべし左すれば吾社は其間に立ち双方へ申送り相談とゝのひたらば改めて此所に廣告して前の廣告を取消し尚ほ一つの女職の途を開きたるとを姉妹方と共に祝はふべき事

前申す如く手數料は一切要せざれども雇ひ主及び望み手の双方へ一應の問ひ合せと其後ち否やを返事するとにより少くとも三四回の郵便を出さずば相成まじ因て双方とも御依賴の初めに郵便切手拾錢を封入して賴み越されたき事。

教育時論第百五號目次

明治二十一年三月十五日發兌
版權所有

社說●現今の諸學令に對する我等の感情 **教育**●私家教育論ニッキ（遠藤秀三郎）●小學德育の感（小竹啓二郎）●小學校の經濟●獨逸の育兒法（木下邦昌稿）（中川重麗譯）**理科**●化學の大意（杉山文悟稿）**哲學**●智識ノ根源（高橋治郎譯述）**文藝**●和歌●詩●人はおしへと先天と（ゑひ）**傳記**●エム、シブル●彌爾ール氏畧傳學術傳（田中登作町田則文合譯）**內外雜纂**●話の種外十五件

本誌一册定價金五錢郵稅一錢
見本ニ限リ郵便切手代用不苦

發兌所 東京下谷區練堀町十四番地 開發社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

細君の友

此書は英國「ドイグ」夫人が子供のそだて方より下女下男のめしつかひ方に至るまで凡ろ細君の心得となるべき事物を親切に說き明したる良書にして且つ總ふりかな付きなれば誰にても讀み得べきなり

再版 代價金四拾錢 郵稅金拾四錢

明治廿一年三月

神田雄子町 輿論社

● 六合雜誌 第八十七號 三月廿日發

目次 ● 天主敎、希臘敎、及新敎(デフォレスト) ○有神論無神論の戰爭傍觀批評(高橋五郎) ○四福音の由來(宮川經輝) ○基督信者墓碑銘の談(ヘーリング) ○傳道の二要素(小崎成章) ○基督敎會歷史とフイシシャル敎授(白猿山人) ○現時の學術上より聖書の創世記を論す ○基督敎の性質 ○基督敎とマホメット敎 ○廣告(代價一冊金拾錢郵稅不要)

發行所 京橋區日吉町二十番地 警醒社

勝安房君題著 津田仙君著

酒の害 全

一冊定價郵稅共金拾錢 ● 四冊以下一冊え付全前 ● 五冊以上十冊以下一冊に付割引價五錢(但遞送料ハ別に申受く) ● 百冊以下一冊に付割引價四錢(全前) ● 百冊以上一冊に付割引三錢(全前)

右第一版千五百部ハ一週間內に賣盡し候に付第二版出來候間續々御注文被下度候

出版 東京 婦人矯風會

賣捌 東京麻布本村町 學農社雜誌局

全 京橋區日吉町 警醒社

全 全 女學雜誌社

發	兌
一月。	七日 十四日 廿一日 廿八日
二月。	四日 十一日 十八日 廿五日
三月。	三日 十日 十七日 廿四日 卅一日
四月。	七日 十四日 廿一日 廿八日

定	價
一册。五錢	郵稅。一錢(但府內無郵稅)
十册。四十八錢郵稅。十錢	(同前)
半年分	一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣 告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

明治廿一年三月十二日
自第百二號 至第百十一號 拾册
版權登錄

明治二十一年三月廿二日印刷
明治二十一年三月廿四日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京京橋區日吉町八番地寄留 嚴本善治

印刷 東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地 森田豐